

ソフィアの歌

五木寛之

Itsuki Hiroyuki



新潮文庫

ソフィアの^{うた}歌

新潮文庫

い - 15 - 33



平成九年七月一日発行

著者 五^ら木^き寛^{ひろ}之^{ゆき}

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六―五四四〇

電話 読者係(〇三)三二六六―五一―
振替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Hiroyuki Itsuki 1994 Printed in Japan

ISBN4-10-114733-7 C0195

新潮文庫

ソフィアの歌

五木寛之著



新潮社版

5924

目

次

I	極道紳士・井上靖さんの片影	九
II	桂川甫周とソフィアの歌	三二
III	紋甲イカとベートーヴェン	五三
IV	十字監獄の女たち	六〇
V	F1レースと鈴鹿の〈論楽会〉	七六
VI	こぞの雪、いまいずこ	九八
VII	ネヴァ川にジャズは流れる	一〇九

VIII	ロシアの犬は何を食べているか……………	一二四
IX	ツアールスコエ・セロは冬景色……………	一三〇
X	カペラ合唱団とはなにか……………	一四二
XI	歌は国境と時代を超えて……………	一四九
XII	恋歌から革命歌への変遷……………	一五五
XIII	ああ、スクーシノ、憂き世かな……………	一六九

解説 袴田茂樹

ソ
フ
ィ
ア
の
歌

I 極道紳士・井上靖さんの片影

夢の途中で目をさました。金沢の主計町かずえのあたりを歩いている夢だった。時計を見ると午後の一時をすこし過ぎている。朝の九時にベッドにもぐりこんだのだから、たっぷり四時間は眠ったわけだ。モスクワからの夜行列車の疲れが、ようやくとれた感じだった。

おそろしくスチームがきいていて、部屋は汗ばむほどあたたかい。パンツとシャツだけの格好で窓のところへいき、カーテンをあけた。

空はどんよりと曇っている。雪はやんでいたが、いかにも寒そうな冬景色だった。ネヴァ川の水面が視界いっぱいにはひろがっている。すぐ目の下の支流は、流水で白くおおわれている。ところどころに氷の裂け目が鉛色に光っているのが、なんとなく不吉な感じがする。

大ネヴァといわれる本流のほうは、ほとんど凍結していない。豊かな水量がキーロフ橋のほうへゆつくりと動いていくのが見える。白い三角形の流水がすこしずつ移動していくので、流れのスピードがわかるのだ。

今朝、チェックインしたばかりのこのホテルは、すぐ目の下にネヴァ川を見おろす絶好の

場所にあった。サービスや設備はともかく、リバー・サイドからの眺めだけはサンクトペテルブルグ随一といえるだろう。

手をのばせばとどきそうな位置に、オーロラ号が停泊していた。三本煙突のこの旧式の軍艦は、一九一七年のロシア革命のシンボルとして有名である。約六千トンのこの巡洋艦は、日露戦争のときには旧バルチック艦隊の一員として日本海海戦にも参加したキャリアを持つらしい。その後、ロシア十月革命の当日に、対岸の冬宮にむけて歴史的な第一発を発射したことで一躍その名をとどろかせた。いまはロシア海軍博物館の分室として、ひっそりと肩をすくめるようにネヴァの合流点に係留されている。

そのオーロラ号の背後の典雅な建物の上に、金色に輝く尖塔せんとうが鋭く空にのびているのが見える。たぶんあれがペトロパウロフスク要塞ようさい内の寺院の塔だろう。この街ではもっとも高い尖塔だと聞いたことがある。

こうして眺めてみると、サンクトペテルブルグという街は、おそろしく平べったい街であることがわかる。キーロフ橋のあなたに聖イサク寺院のドームがはつきり見えるのも、ほかに視界をさえぎる高層建築がまったく建てられていないせいだろう。

サンクトペテルブルグ。

この街がそう呼ばれるようになったのは、つい数年前からのことである。それまではロシア革命以後、六十七年にわたってレニングラードとして世界に知られていた。社会主義ソ連

邦の劇的な崩壊のあと、かつての帝政ロシア時代の栄光をしのばせる名前が突如として復活したのだ。私がかつてエルミタージュ美術館の取材のために訪れたときは、この街はまだレニングラードだった。

レニングラード。

革命家レーニンのイメージはともかく、異邦人の耳で音の響きだけを聞くと、それはそれで決して悪くない名前のような気がしないでもない。レニングラード交響楽団。レニングラード・バレエ。レニングラード高等音楽院^{コンセルバトワール}。レニングラード攻防戦。そしてこのホテルの壁面には、いまだにレニングラード・ホテルの文字が残っている。

これが歴史というもののなんだな、と、私は鉛色のネヴァの河面^{かわも}を眺めながら思った。国も変る。街も変る。人も変るし、また思想も変る。このネヴァの流れとても、いつかは変るかもしれない。もともとこの石造りの壮麗な大都市さえ、三百年前には存在しなかったのだ。葦^{あし}の生いしげる無人の湿地帯に忽然^{たちぜん}と幻のような街が誕生し、詩と文学と音楽の黄金時代が訪れ、やがて革命と粛清と戦争の嵐^{あらし}が吹きすさび、そしてソ連邦の崩壊とロシアの復活がもたらされた。ペテルブルグから、ペトログラードへ。さらにレニングラードと改名され、一九九二年二月末のいまは、サンクトペテルブルグと、いかにも重々しい名前で呼ばれている。いつかまた、べつな新しい名前がこの街の上に冠せられる日が絶対にはないとは言えないだろう。

突然、白いものが舞いはじめた。雪だ。ネヴァ川の暗い河面に、吸いこまれるように白い雪が消えてゆく。

テレビ取材クルーとの集合時間までは、まだ一時間半以上もあった。ルーム・サービスでコーヒーでも頼みたい気分だが、電話の応対がおつくうな気がする。冷蔵庫をあけてみると、なかはからっぽだ。ふと思いついてトランクの中をひっかきまわす。毛糸の靴下くつしたに包んでモスクワからもってきたツイナンドーリが一本、ごろりと出てきた。ツイナンドーリは、ゲルジア特産のワインである。かつてスターリンがこよなく愛した酒として、つとに有名だった銘柄めいざらだ。

早速、椅子いすとテーブルを窓際まどぎわに運んでくる。パンツ一丁でワインを一杯やりながら、ペテルブルグの雪景色を楽しもうという思いつきである。

しかし、わざわざモスクワから持参したツイナンドーリは、どうも甘すぎるような気がする。あの冷酷非情の粛清者スターリンが、こんなワインをめっぽう気に入っていたというのは、どうもげせないとこもあるが、彼が本名をジュガシビリジュガシビリといっってゲルジア出身の人だったことを考えると、なんとなく納得のいくところがないでもない。

第二次世界大戦の戦後処理を相談するヤルタ会談が旧ソ連領クリム半島のヤルタで開かれたのは、一九四五年のちょうどいまごろ、二月のことである。ヤルタに集まったルーズベルト、チャーチル、スターリンなどの連合軍の大ボス三人のなかでは、さすがに老大国イギリ

スのチャーチルが酒に関してもいっぱしの通人だったようだ。彼はヤルタで出された甘いツインダーリには目もくれず、アルメニアのコンヤックがいたく気に入ってそればかりを飲み、戦後ずっとスターリンから直接、アルメニア産の最上品を毎年送ってもらっていたという噂だった。

ネヴァ川に舞う雪を眺めながら、スターリン好みのワインを半分ほどからにしたところ、ふと脈絡もなくおかしな話を思いだした。

あれは二月二十日に東京を発つちよつと前のことではなかったろうか。いつも仕事場に使っている芝のホテルの三階にある〈五徳〉という寿司屋で、客がとだえた深夜、

「エリツインさんって、酒、つよかったよなあ」

と、カウンターの中の某君がひとりごとのようにつぶやいたのだ。

「エリツイン氏がここに来たのかい」

と、私。

「ええ」

「ひとりで？」

「いいえ。通訳の人とか、四、五人で」

「そのとき彼、なにを飲んだんだい」

「剣菱です」

「冷やで？」

「いえ、熱燗あつかんで。それもキュツ、キュツと一気に放りこむように、ね」

「ふーん。酒がつよいとは聞いてたけど」

「ええ。もう、ガンガンいつてましたよ。気持ちがいいくらいいつよかった」

「どんなもの、つまんでた？」

「ウニとか」

「ウニ？」

「北方領土でとれたウニですって冗談いったら、笑ってました」

新生ロシアの大統領が東京で剣菱なら、こちらはペテルブルグでツイナダーリを飲む。

チャーチル氏はロンドンでアルメニアのコニャックか。こんど取材にやってきたTV番組のタイトルは〈歌は国境をこえて〉というのだが、なんとなく〈酒は国境をこえて〉というほうがおもしろそうに思えてきた。

どうやらききすぎるスチームのせいで、急に酔いが回ってきたらしい。いろんな連想が、下手な音楽プロモーション・ビデオのように断続して頭の奥を駆けぬけてゆく。

なみなみとコニャックの注がれたグラスをぐいと持ちあげる無骨な指。たちまち飲みほされてゆくグラスの中のブランドー。

「そうですか。△三ノ宮炎上△が、いちばん好きですか。それは、五木さんらしいですね」

すこししゃがれたような、丁重な言葉づかいの声が不意に記憶の底からよみがえってきた。先年、亡^なくなられた井上靖さんの声だった。井上靖さんとエリツインさんとは、どちらが酒はつよいだろう、などと、ふとどうでもいいことを考える。元気でいらしたころだったら、小柄な井上さんは、堂々たる体格のロシア共和国大統領と互角の勝負をされたのではあるまいか。

雪はますますはげしくなってきた。対岸の聖イサク寺院も、キーロフ橋も、ほとんど見えないくらいの勢いだ。風もかなり出てきたらしい。

井上さんは、なぜソフィアのことを小説のなかから消したのだろう、と、以前から不思議に思っていた疑問が、ふたたび頭をもたげてきた。その小説というのは、ここペテルブルグの場面も登場する歴史小説、〈おろしや国酔夢譚^{すいむたん}〉のことである。

〈おろしや国酔夢譚〉は一九六九年に新潮社の第一回日本文学大賞を受けた作品で、のちに日露合作映画の大作にもなって話題をあつめた。近年のいわゆる大黒屋光太夫^{おうちやうたう}ブームの先き駆けをなした作品である。このなかに興味ぶかい一場面があって、そもそも今回こうして私が冬のペテルブルグまでやってきたことも、ある意味で関係がないわけではない。

それは、伊勢^{いせ}白子の船頭、大黒屋光太夫が難破漂流してロシアに渡り、数奇な運命の手にもてあそばれながら遂^{つひ}に帰国の志をはたすという、スケールの大きい史実にもとづいた物語なのだが、井上さんの〈あとがき〉にもあるように、基本資料として用いられたのは、亀井